

# 半分引きこもり



なすがまま

## 半分引きこもり

---

### 1 歓喜

――妊娠した？

生理が遅れている。結婚して半年が過ぎていた。

その日、仕事から帰った真司に話すと、「やったー！」とガッツポーズを取って喜んで言う。

「で、いつ？ いつ？ 俺はいつ父ちゃんになるんだ？」

「せっかちなえ、まだ確定した訳じゃないわ。明日、病院に行ってくる。だから、お義父さん、お義母さんには、まだ言わないでよ」

階下にいる義父母には、妊娠が確実なものとなってから言いたいと思う。後から、違いましたと言って、ぬか喜びなどさせたくはない。そんな彩の思いを深く理解したかは分からないが、とにかく真司も同意した。

「なーんだ、そっかあ、うん、分かった。うははははー、とうとう俺も父ちゃんか、すげえ」

「だから、まだ確定してないって」

「男かな、女かな？ 彩はどっちだと思う？」

「だから、まだだって、でも、私は女の子が良いから、女の子」

「うーん、俺は、やっぱ男が良い」

まだ見ぬ赤ちゃんの空想は楽しい。

「でも、もしも女なら、彩に似ていて欲しいな、俺」

「男の子なら、あなた似でね」

ふたりは互いの顔を見詰め合って、微笑む。そうやって楽しい空想を延々と続けた。

翌日、病院での検査の結果、妊娠は確実なものとなった。病院からの帰り道、自然と笑みがこぼれ、すれ違う人の怪訝そうな視線を受けて歩く。

バス停で真司に絵文字をいっぱい入れてメールを送った。程なくして返ってきた真司からのメールは、ハートと音符マークがいっぱい並んでいる。

家に帰れば、真司の帰りが待ち遠しくてたまらない。

やっと帰って来た真司は、満面の笑みに声を弾ませ、両手を広げ、彩を抱きしめた。

その日、ベッドの中に入っても、真司の喜ぶ声が耳に残っていた。目を閉じれば、抱きしめられた感触も思い出せる。

次の日から、ふたりは何をしても、楽しい時間を共有した。ふたりで楽しい空想をしては喜び、笑い合った。

それは次の日も、また次に日も――

検査を受けたのは、出産への不安を一つでも取り除いておきたかったから――。日を追うごとに、妊娠の喜びが増す分、出産への不安が大きくなったから――。

幸いにも、ここの病院には、その検査が出来るとインターネットのホームページに記されてい

るのを、何度も確認していた。

何回目かの妊婦検診の日、そう十二週を過ぎた頃だった。担当医に羊水検査を受けたいと伝えようと、「若いので、その必要は、ないでしょう」と、取り合ってはくれなかった。けれど彩は「安心して出産を迎えたいので、どうしても」すがつた末、漸く担当医が折れ、「まあ、そんなに不安なら、それを無くして、出産に備えるのも良いかも知れませんね」と、手はずを整えて、検査となったのである。

そうして、十五週と三日目の日に、胎児の染色体異常の有無を調べるため、羊水検査を受けた。

検査終了後、担当医が「若いから大丈夫だとは思いますが。なので、中間結果は聞きに来なくても良いでしょう。最終結果が出るのは四週間後となります。その辺りの定期健診の日に、検査結果を知らせるようにしましょう」と言った。

予約していた定期健診の日、羊水検査の結果確認も兼ねて出かけた。

## 2 陽性

羊水検査は破水する恐れがあるとも聞いていたが、何も起こらない。

それどころか、先週辺りから、胎動を感じる。昨夜は、彩のお腹に耳をくっつけていた真司にも、それが伝わったらしく、「おー！」と、感動の声を発していた。

病院では、体重測定、血圧測定、検尿、血液採取、超音波検査を、いつもと同じように受ける。そのあと医師の説明を聞く。今回はそこに羊水検査の結果確認が加わる。

羊水検査を受けたというだけで、彩の抱える不安は小さくなっていた。その上に、お腹の中で元気に動く赤ちゃんからの声、胎動である。検査を受けなければならない年齢でもない。彩は安心して結果を待つ。

「どうですか？ もう、胎動を感じますか？」

「はい、動いています」

「そうですね、赤ちゃんは、とても元気です。心拍にも問題はありません。ただ、羊水検査の結果が陽性で、ダウン症を示す数値が出ています。確立は、九十四パーセントと、かなり高い数値です」

「……？」

彩の視線の先には、今しがた撮ったばかりのエコー画像、そこには小さな赤ちゃんが映っている。全回に見たときよりも大きくなっている。小さな手を口元に添えているらしい。

「帰って、ご主人と、よく相談してください」

頭の中が真っ白になる。血の気が引いて、頬の産毛がざわつき、浮き立っていく。カーツとしてくるが、手が、指が冷たくなってゆく。担当医が時々、彩の顔を凝視する。そしてまた繰り返し、ゆっくりと喋る。彩には、その説明が途切れ、途切れに届く。届かない言葉もある。

「数字が低くても……ダウン症であることは……あります。逆に高いと……間違いなく……ダウン症児です」

「……そ、そんな」

「生まれてくる赤ちゃんには障害があるでしょう……中絶するなら早いほうが……けれど、ダウン症児だからと言って、中絶するだけが賢い選択という訳でもありません。帰って、ご主人と相談して決めてください」

「……はあ」

「妊娠期間も二十週と進んできましたから、中絶するなら早く決断を……これは妊娠中期中絶の注意点と心得、当病院の手順を書いたものです。よく読んで、ご主人と、しっかり相談してください……中絶するなら、この用紙に、ご主人のサインを……とにかく早く決めて……」

何が何やら分からぬままに、渡される書類を手にする。看護師が「こちらへ」と声をかける。導かれるままに診察室の外へと、夢遊病者のような足取りで出る。

幽体離脱でもしているかのような感覚で会計を済ませ、病院の外に出る。大通りまで出たところで、吐き気が襲ってきた。

——悪い夢？ それも吐き気がするほどに。

つわりの期間は終わったはず。けれど、今また、吐き気が彩を襲う。道端で手を口に当てたとき、もしかしたら悪い夢も一緒に出るんじゃないか？ そんな気がして、道路脇の植え込みの陰にしゃがみ、吐いた。

酸っぱい胃液だけが出たあと、少しばかり落ち着くと耳の奥が「ぐわーん」と鳴った。その雑音の間隙から、さっきの担当医の声が「ダウン症です」と、繰り返している。

低い背丈のこんもりとした植え込み、その真ん中に背の高い街路樹、それが規則正しく並ぶ大通りの車道と歩道の境界。高い木の若葉から漏れる陽の光が、歩道にこぼれている。朝、歩いてきた時には、キラキラと輝いて見えた。

だが今は、恨めしい。陽の光さえもが疎ましい。

### 3 苦悩

——どこをどうして、帰り着いたのだろうか？

習慣だけを頼りに戻って来たらしい。家の鍵を開け、無言のまま二階に上がる。物音に気付いた義母が、何かを言ったようだが、彩は応えない。

彩夫婦は、真司の両親との同居である。家は玄関が一つだから、二世帯住宅とまでは言えないだろう。トイレは各階に備わっているものの、バスルームはひとつ、広いリビングキッチンも共有。その一階の和室、二部屋を義父母が使い、二階部分にある三部屋すべてを、彩たち若夫婦が使っている。

三部屋のうち二部屋は続き部屋で、大きな三枚の引き戸となっているので、ふたりのリビングと寝室。その寝室には二畳ほどの、ウォーキングクローゼットが付いている。廊下をはさんだもうひとつの部屋は、子供ができたときに使う予定で、今はほとんど空き部屋である。

階段を上がりきり、左側にあるふたりだけのリビングに入ると、途端に涙が溢れた。

目の前に見える長ソファに向かって歩き、持っていたバッグを手放し、ソファに身を預

ける。シートにあった小ぶりのクッションを抱き寄せ、腰を回転させ、肘掛に頭を乗せた。

涙でかすむ天井を眺めると、「障害児」という言葉が、繰り返し繰り返し、聞こえてくる。テーブルの下へと手を伸ばし、そこに置いてあるティッシュの箱をつかんで、胸の上に置く。連続二回ティッシュを抜き取り、涙と鼻を拭き、独り言をつぶやく。

「何で、何でよ」

お腹に手を当てて、問いかける。「何事？」と、言うかのようにお腹の中で赤ちゃんが動いた。

動いた赤ちゃんが、今は違うもの変わったような気がした。検診時のエコー画像は紛れもなく、小さなあかちゃんだったにもかかわらず……

階下から義母の呼ぶ声が聞こえる。けれど返事をする気力はない。じっと、クッションを抱きしめ、「何で、何でよ」と繰り返していた。

そうするうち、小さな子供のように泣き疲れて、彩はまどろんだ。

不意に真司の声が聞こえて、はっとした。彩は自分が眠っていたことに気付いた。ぼんやりする意識の中には暗闇が見えた。

——うん？ もう夜なのか、寝てたんだ、私。

彩が身体を起こすのと同時に、真司の怪訝そうな声をはっきりと聞こえる。

「こんな暗がりは何してんの？ 寝てたの？ 彩、電気、点けて」

言われて、彩はテーブルの上にある白いリモコンを取り、リビングの電気を点けた。急に明るくなったリビングは、異常なほどに明るく眩しい。

「おかえり、うん、そう、寝てみたい」

ホンの数秒間、平穏なときが流れた。そう、真司が喋りだすまでは——。

「ただいま。今日、病院に行ったんだろ？ 帰って来てから、何も言わずに、部屋にこもってる、って言って、母さんが心配してた」

一気に悲しみの渦の中に落ちてゆく。涙が溢れそうになるのを懸命に堪える。

耐えるのに全神経を使うから、億劫で立ち上がれない。真司がスーツを脱ぐのを呆然と見つめる。妊娠が分かってからは自分で、スーツをクローゼットに仕舞うようになっていた。今も歩きながら、片付けながら訊く。

「しんどいの？」

「うん、ちょっと……」

真司はウォーキングクローゼットから戻り、ワイシャツの前ボタンを外しながら、向き直る。

「母さんが、ご飯、できてる、って言ってた」

「食欲がない、今は食べたくないの……、ひとりで食べてきて……」

「そう、でも、ご飯、食べないと、また母さん、心配するよなあ——」

つわりの症状が出てから、何度か、そんな事がある。真司は無理強いはいしませんが、母親への説明だけは煩わしいと、何度となく言った。今回もそんな思いをにじませている。それが分かる彩

も立ち上がろうとしたが、義父母の顔が浮かんで、重い気分になり身体が動かない。

「やっぱ、だめ、ひとりで食べてきて」

「しんどい？」

「うん、まあ、でも、こうしていれば、大丈夫だから」

ジャージの上下に着替えた真司は、渋々ながら納得して、階下へと降りて行った。

ひとりになると、力が抜ける。四方からくるら重い空気の圧力を感じる。時の圧力も重なる。食事を済ませて、戻ってきたら、話さなければならない。言えば真司もショックを受けるだろう……。

また涙が溢れた。

#### 4 伝言

「落ち着いたら食べて、母さんが」

小一時間ほどして真司が、お盆を持って戻り、リビングのテーブルの上に置く。

ソファに座ったままの彩は、目の前に並んだお盆の上の、ご飯とおかずを見ると、涙が一気に溢れてきた。あとからあとから、止めどうもなく溢れる。

「な、何？ どうしたの？」

驚く真司に、泣きながら嗚咽の混じるか細い声で、「赤ちゃんが、赤ちゃんが……」そのあとに続く言葉が出てこない。

「何、赤ちゃんが、どうしたの？」

彩も伝えようと、「赤ちゃんが」と、言うのだが、そのあとの言葉の代わりに、「ぐわー」という声だけが漏れる。

「何、何なの、言ってくれなきゃ、分かんないよ」

泣くばかりの彩に、真司は苛立ち始めていた。

漸く、嗚咽交じりに鞆に入れたままの説明書類を出し、言われた経緯を話した。泣きながら話す間、真司は独り言のように、ぼそぼそと呟きながら聞く。

「ダウン症？ 障害って……、中絶かあ……、育てる覚悟って、言われても……、普通の子供も、よく知らないのに……、中絶かあ……」

病院からの説明書類、そのうちの妊娠中期、中絶申請用紙を見ながら真司は呟く。

「今回は、諦めろって、事か……」

真司に伝えると、少しだけ気が軽くなった。けれど……

お腹の中には小さな命がある。今日だって、超音波で頭、胴体、それに小さな手足を確認してきた。その小さな命は今、生きている。それなのに、中絶するって……

——殺すって、事？

確かに今日の朝までとは違う、何か他のモノに変わったようには感じた。けれどそれでもやはり、お腹の中には赤ちゃんがいる。それなのに殺す？

彩は慌てて、尖った声で言った。

「生きているのよ。今も、ここに。ほら、動いている」

自分のお腹をなでながら言う彩の言葉に、真司も戸惑っている。

「そうだよな……でも、産むには覚悟がいるって……」

「覚悟って、何？ 検査なんかしなけりゃ良かった。生まれちゃったら、覚悟も何もあったもんじゃなかったのに」

「そりゃあそうだけど、もう、俺たちの赤ちゃん、はダウン症っていう障害を持っているって、分かってしまったしなあ……」

「だから、諦める？ それは結局、殺すってことよね」

「殺すって……」

長い沈黙のときが流れた。

「お腹の赤ちゃん、怒ってるだろうな……、殺すなんて、嫌だ……、でも……、分からない……」

独り言のように彩が言った。

決められない。互いに同じ思いが行ったり来たりしていた。彩は言葉にならない思いが浮かぶ。

——どうなるんだろう、私の赤ちゃん……。

自分で決断できない。

初めての妊娠で、「障害児です」と言われ、育てる覚悟だの何だのと言われ、覚悟を決める人は、いったい何組くらいいるのだろう。今回は諦めて、次の機会を待つだなんて、そんな簡単にはいかない。

自分も、真司も、両方の親たちも、この妊娠をどれほど喜んだことか——。

それなのに「諦めろ」だなんて、あまりにも酷い。考えると、また涙が溢れた。

「親父と母さんに、言わなくっちゃなんないのか……」

「えっ？ 言わないといけないの？」

「そりゃあ、まあ、黙ってる訳には、いかないだろうなあ」

「でも、、まだ……」

まだ、どうするか、決まっていないと、言おうとした。だが止まらない涙と鼻をティッシュで拭う間に、真司が言う。

「どうするか、決めても、言わないといけないのは、同じだしなあ」

確かにそうなのだろう。けれど、彩は何か腑に落ちないものを感じる。上手くはいえないのだが。

そもそも階下にいる義父母が苦手なのだ。いつも何かに苛立っているようで、楽しそうに話すところを見たことがない。それなのに、ここでまたショックを与えるような話をすれば、どうなるのか。そう思う反面、誰かにすがりたい気持ちもわいてくる。ふたりで決められないなら、下の義父母に頼るのも、仕方のないことなのか……。

おそらく真司も同じような気持ちなのだろう。そう思うことで納得した。

## 5 義父

促されて、彩はティッシュの箱を抱え、ふたりに階下へ降りる。

下のリビングでは、義父母が揃って難しい顔つきのまま、バラエティー番組を見ていた。真司の「話がある」という言葉で振り返り、「何だ？」と訝しがりつつ、義父がリモコンでテレビを消した。

リビングと言っても、ソファがある訳ではない。いわゆる茶の間である。そこに大きな座卓が設えてあり、義父母はそこに向かい合って座っていた。テレビを消すのを見届けた真司は、キッチン側にある食卓テーブルの椅子に腰掛けた。隣に彩が腰掛けると、義父母も移動してきて、食事時のいつもの席に着く。

「何、どうした？」

義父の言葉を皮切りに、真司が事の次第を話し始めると、ふたりとも血の気が引いた青白い顔になった。時折、義母が、「えー、そんな」と小さく言い、泣いている彩を見ては、目を逸らす。

真司が話し終わると、皆が沈黙し、重苦しくよどんだ空気が漂った。

やがて、その沈黙の闇から、義父が手探りに、ゆっくりと声を出して言い始める。

「育てるのは、大変だろうなあ……。覚悟って、言ってもなあ……。障害を持っている子を、どうやって、育てるんだ？ 大きくなって、苛められでもしたら、かわいそうだしなあ……」

背中を丸め、うつむいたまま、「障害児があ……」とボソッとやった。

彩は何か罪を犯したような気分になった。その傍らで、「そうか、苛められることもあるのか」と義父の言葉に聞き入る。義父は生まれてくる子の祖父として、孫の不憫さに思いを馳せているのだろう、再度つぶやく。

「そうだと分かっている、産むことはないか……。苛められでもしたら、かわいそうだしなあ……」

そうやって、義父は独り言を言いながら、真司から聞いた内容を解した。そのあと、暫く考えるふうであった。

やがて、大きく息をすると、声の調子が変わり、丸めた背中も伸ばして、「子供は、また、出きるか……」と言った。そして思い切ったように言う。

「今回は諦めるか、なあ、真司、彩。子供は、また出来る。きっと出来る」

義父の言葉を待っていたかのように、その言葉を聞いた義母の言葉が続く。

「彩さんもショックだろうけど、生まれてきてからだったら、後戻りはできないのだしねえ、どうあっても育てていかないといけないのだしねえ」

彩は思い出したように涙が溢れるが、義母の言葉に押されるように、義父が力を込めた声が聞こえる。

「苛められでもしたら、かわいそうだ、今回は諦め。なっ、子供は、きっとまた出来る。なっ」

お腹の中にいる自分の赤ちゃんが、望まれない子供であると知り、哀しくて彩は泣いた。障害を持った子供であることが哀しくて涙。普通でないことが哀しくて――。哀しさで涙は、あとからあとから零れる。

本当に罪を犯したような気分だ。ちゃんとした赤ちゃんを身ごもらなかった罪。

この間、真司は終始、黙ったまま、一言も言葉を発していない。この恐ろしい決断から逃れたいかのように――。

決断に念を押すように、義父が言う。

「子供は、また出来る。それで良いよな、真司」

涙の向こうで、僅かに頷く青白い真司の横顔、その中にある、ほんの少しの安堵の色を、彩は見逃さなかった。

## 6 中絶

実家の母と義母に付き添われ、義父の運転する車で病院に向かう。午後の陽射しが窓から入ってきて、眩しいくらい良い天気、五月晴れである。お腹の赤ちゃんの処置を受けるというのに――。

1日入院の上、行う施術ということで病院に着いて直ぐ、入院手続きを済ませ、用意された病室に入る。看護師の指示で入院着に着替え、ふたりの母を病室に残し、彩ひとりが婦人科の診察室へと行く。

明日の手術に備え、子宮頸管拡張術という、子宮の入り口を広げるための処置を受けるためである。二ミリほどしかない子宮の入り口を、もう少し、三ミリほどに広げるため、挿入後に徐々に広がるスポンジのようなものを入れるのである。

スポンジを入れるとき担当医が、「少し痛みます。スポンジは十五分ほどで、ジェル状になりますから、そうしたら痛みはなくなります。それまで頑張ってくださいね」と、言う。

間もなく、生理痛のような痛みが、下腹部から腰周りを襲う。痛みを耐え、数分で処置は終わったものの、あまりの痛さで処置後も彩は立てない。看護師に支えられ、処置台から奥のベッドへと移り、痛みが治まるまで横になって思う。

――う、ツ、痛い！ ちくっ、とするだけかと思っていたのに……。

自分の浅はかさを悔いる。それでも、30分後には痛みも消え、またひとり歩いて病室に戻った。そこで待っていたふたりの母には、ひとりで大丈夫だからと帰ってもらう。

ひとりになると、涙が溢れた。痛みを耐えても、悲しみが残ることが、切ない。これが出産なら、痛みを耐えた分、喜びがある。けれど彩が耐えた痛みのもとには――。

夕食後、随分と経ってから、会社帰りの真司が病室に顔を見せる。朝、顔を合わせたのに、何だか久しぶりのような気がする。ほっとしたのだろう。

真司に余計な心配をさせたくはない。それに暗闇に落ち込みたくもないので、今日の施術の痛

みを彩は陽気に話す。少し、オーバー気味に――。

病院の消灯時間は早い。

明日の手術は朝、早い。明日、迎えに来る約束時間の確認をして真司は帰った。

眠りに着く前、思い出したように涙が溢れた――。

翌朝、看護師が体温やら血圧やらを測ったあと、膣座薬を膣内に挿入する。出産を誘発するのだそう。定期的に三回も挿入した。

暫くして、義父母と実母、それに真司がやって来た。その直ぐあとには、ストレッチャーを押した看護師が入ってきて言った。

「では、今から手術室に行きますので、こちらへ移ってください」

言われるままに、ストレッチャーへと移り、そのまま運ばれる。

手術室で、手術台に移ったあと、「では始めますね。痛くもなく、気付いたら終わっていますから」と、言い、麻酔医に全身麻酔を掛けられ、意識が遠のく。気が着いたら看護師の声がして、気が着きましたか？」

そこで真っ先に彩が思ったのは、あかちゃんがいなくなったんだということ――。

再びストレッチャーに、今度は彩の身体の下のシーツを、看護師四人が「せーのっ！」と掛け声を掛けて、持ち上げて移す。天井の蛍光灯が次々と足元へと流れるのを見ながら、病室に戻ると真司だけが待っていた。少し意識もはっきりとして、ここでのベッドへは身体を回転させ、転がるようにして自分で移る。落ち着いたところで、看護師が真司に向かって言う。

「あと少ししたら、飲み薬を持ってきます。先生も説明に来ます。そうしたら、帰っても良いですよ。じゃ、もう少しだけ、待っていてくださいね」

真司が応えると、看護師は出て行った。それを見届けたあと、真司が穏やかな声で言う。

「赤ちゃんを火葬にするため、親父の車で母さんたちも一緒に行ったよ。弔いは賑やかなほうが良いだろうって」

麻酔の残る彩は黙って頷く。聞きながら、他人事のようで、別世界の出来事のようにも感じた。あまりにあっけない。

――こんなに簡単に赤ちゃんが居なくなってしまうなんて……。

前もって聞かされてはいた。そして本当に昼前には、帰された。

真司の運転する車で家に帰る。

家には皆が戻っていた。そして労いの言葉を掛けられ、部屋で休むように言われ、彩は何とも表現しづらい思いで、二階に上がった。ベッドに入ると、哀しいようでいて怒っているような奇妙な感情がわき、困惑しながら天井を見つめる。

――これが喪失感というものだんだろうか……？

昼食にと義母が作った卵とじうどんを、真司が運んできた。食欲はないが、朝から何も食べてはいない。ゆっくりと、うどんをすする。

## 7 悲嘆

翌朝、彩はベッドから出なかった。思い出したように、泣いたり、ただぼんやりして一日を過ごした。

次の日も、また次の日も――。

もう一ヶ月が経つが、一日のほとんどの時間をベッドで過ごしている。時折、這い出てテレビを点けてみるが、画面の中の喧騒が煩わしく感じられて、直ぐに消す。

最初の喪失感に加えて、罪悪感も首をもたげ、それが彩を責める。

真司は腫れ物に触るかのように、彩に接している。それがまた疎ましく感じたりもする。真司に責任がないことははっきりしているから、そんな自分が自分でイヤになる。

あれから、義父母とはご飯を一緒に食べていない。始めのうちは体調が良いなら、一緒に食べるようにと真司も勧めた。けれど真司のそんな言葉に対し、背を向ける彩。何とかしようと気を使った真司は、ある日、「何か欲しい物があれば、買って来てやるよ」と言ったのである。

彩には、渡りに舟であった。それから、朝、欲しいものを伝えれば、会社の帰りに買ってきてくれるようになった。

階下の義父母も同じで、彩には何も言わず、義母は彩の分の食事も用意してくれる。真司には何か言っているようなのだが――。

どうしても一緒には食べられない。一緒に食卓に着くところを想像するだけで、彩は寒気がする。罪を犯したような気持ちになるのが拭えない。それは赤ちゃんを死なせてしまった罪とは違う別の罪。そう、それは健常児を身ごもらなかった罪。

彩は二つの重罪を背負った気でいた。

家の嫁として、長男の嫁として、彩は罪の意識に苛まれ続けていた。だから心苦しくて、義父母の顔を見ながら食事をするのができないという、後ろ向きの感情に支配されていた。

何もしないで、ただ悲嘆にくれているうちに、二ヶ月、三ヶ月と時は過ぎていく。

真司の話によると、義父も「俺らの娘やと思うているから、何も心配しなくて良い。元気になるまでのんびりしていたら良い」と言っているらしい。

ひとつ屋根の下に暮らしながら、ほとんど下に下りない彩は義父母と顔を合わせない。お風呂に入るのも、階下が寝静まってからにしている。だから義父母の様子や言葉は、真司から聞くだけである。そんな彩でも、ふと自分の行動に思い至る。

流石に半年も経つと、階下から直接、義母が声を掛ける。「ご飯、出来たよー」とか、「お風呂、早く、入りなさいー」などと聞こえてくる。彩も気分の良いときには返事をする。

階下で顔を合わせることも、あるようにはなった。義母は働きにでることにしたらしい。「家に居てばかりも、つまらないしね」と、言ったその顔は、ほんの少しだけ楽しげに見えた。

そして初出勤のその日、「留守番している間は、鍵、開けないようにね。誰かが来ても、出な

くて良いよ」と、二階に向かって、下から声を掛ける。小さな子供に留守番をさせているときのような声掛けの義母。

彩は表通りを見通せる窓際に立った。自転車に跨り、パート先へと向かうその後ろ姿が、颯爽として見える。

日に日に義母が明るくなったように思えるのは、化粧もちゃんとしているからというだけではないだろう。

彩とは言えば、真司から預かったお金で、コンビニへお菓子を買に行き――。

だからこれは、完全な引きこもりではない。日曜日などはふたりで、大型ショッピングセンターへ買い物にも出かける。ふたりで洋服を選んだり、ふたりで遊ぶゲーム機を買ったりして、夕食を済ませてくるときもある。

## 8 再起

悲しみに浸ってもおれない。これではいけないと彩も思う。

義母に倣って、外に出て働こうと、早速、面接に出かける。年も変わって、早、春の訪れをあちこちに感じる三月。赤ちゃんがダメになってから、八ヶ月も過ぎていた。

それでも、まだ三十歳にはならない彩は、即日、採用される。

家から自転車で、二十分の場所にあるその会社は、電気関係の下請け業者である。数ある求人広告の中からその会社を選んだのは、真司が電気関係の会社に勤めるエンジニアだからである。

そして、彩が住むこの地域には大手電気会社の工場があり、その下請け会社が結構ある。こんな時代でも小物を作るその会社には、注文が多く入るらしい。小さな会社だが面接に行った際、案内された作業場には、作業員が十数人いるのが見えた。ほとんどが中年過ぎの女たちのようである。

初出勤の日、女たちに教えられた仕事は、卓上電気スタンドの組み立てで、彩にとっては簡単な作業だった。数人が同じ作業にあたるから、完成品が次々と並べられていく。

午前中の作業が終わり、昼の休憩時間になった。親切な先輩の女たちが数人で、彩を食堂へと案内し、テーブルへと着かせる。親切心とお節介、無遠慮がセットになっていることを彩は知らない。若い彩は、その類の女たちにとって、興味の的なのである。

「ここで食べたら良いよ」

ごり押しで彩を座らせ、自分達もその周りに陣取る。彩は言われるままそこに座り、外に出ることを義母が喜び、嬉々として作ってくれた弁当。それを広げ、一口食べた途端、太った先輩女が唐突に訊いた。すでに女を廃業したかと思うほど、齢を重ねた女である。

「彩さん、子供は？」

彩はギョツとして、顔を上げると、他の廃業おんな達の目も一斉に彩に向けられていた。その手の質問を受けるには、心の傷がまだ癒えてはいない。事の経過など話せる余裕はまだない。うつむき加減に応える。

「はあ、まだ、いませんけど……」

廃業おんな達は彩の胸の内を知る由もなく、あちこちの口から言葉の矢が飛び出す。

「て、ことは、欲しいとは思っているんだ」

「なら、早く作ったほうが、絶対、良いよ」

「うん、若いうちに生んだほうが良いわよ」

彩の心がギリギリとざわめく。

廃業おんな達は、お構いなしに続ける。

「そうよ、何か、今、高齢出産だと、障害児の可能性が高いとか、何とか、言ってるじゃない」

「そう、だから、早く生んじやいなさい」

「そうよね、そうしたら、旦那さんも喜ぶし、早く帰ってくるしねえー」

廃業おんな達は口々に言う。沈む彩の気持ちを益々、海底深くへと沈めるのを楽しむかのように、別の廃業おんなが彩の顔をとらえて言う。

「ご両親も孫の抱ける日を、待ちわびてらっしゃるでしょう」

仕方なく、「ええ、まあ」と返す。その女は強張った彩の顔を見て、ため息まじりに言う。

「まあ、今の若い人は、子供より、自分達の楽しみを重視するのよね。でも、よくよく考えたほうが良いわよ。悪いことは言わないから」

周りの女たちが示し合わせたように、「そうそう」と、頷き合う。

ほんの少しの間、会話が途切れ、これで終わると思ったが、自分が幾つで初めての子を産んだのとかを、女たちは言い合った。聞きたくはないが、彩は少しだけ開放された気がした。

なおも女たちの話は続く。自分たちがいかに、子供に恵まれたかを自慢しあう。少なくとも彩にはそう聞こえた。それが出来の悪い息子、娘の話であったとしても。あっちに孫が何人だの、どこで何をしているだのと延々と続いた。それは彩にとって、心のかさぶたを突き刺すものだった。

そしてやっと、気の遠くなるような昼休みは終わった。

午後の作業には、もう一度、休憩時間があった。彩は廃業女たちから逃れるようにトイレに行った。そして、次の仕事が始まるまで、隠れていた。

――何で、こんなことしなくっちゃいけないの！

翌日、彩は出勤しなかった。一日中、何度も同じ言葉の独り言を呟く。

「ほんと、働くなんて、もうこりごり……」

家人の誰もが、外に出て働いている。だからと言って、家の掃除をしたりすることはないし、食事の仕度をすることもない。コンビニへ行く以外に、階下へ下りることもないし、誰かと話すこともない。

## 9 半分引きこもり

何もすることのない生活が日常化する。時間の経過が傷ついた心を癒してゆく。近頃は一日中、テレビを見て過ごしている。退屈だが、慣れれば平気で、何よりラクである。

外は怖い。家の中は安全。

彩は思う。

——これは、もしかしたら、引きこもりなのかも知れない。否、違う。家事だけはやっている。ならば、半分引きこもり？

家事、って言っても、せいぜい真司と自分の分、ほんの少しの洗濯をするくらいなのだが。それとて、真司はお風呂場で下着や靴下を脱いだら、すぐ傍の洗濯機へと放り込み、義母が自分たちの物と一緒にやってしまう。だから彩が真司の衣服で洗うのは、部屋で脱いだパジャマとワイシャツくらいの物である。

お風呂の準備も義母がやっていて、階下から、「早く、お風呂、入りなさい」と、叫ぶ声を聞き、渋々入るといった具合。

子供は、あれから三年が経つけれど、妊娠さえしてはいない。

彩は近頃、よく考える。——あの時、中絶なんかしたくない、産みたいとも言えなかった。不安ばかりが先立ち、産みたいとさえも思えなかった、と——。

それなのに、真司の言動を心で責める。——障害児、なんて考えたこともなく哀しみに包まれ、中絶という言葉でまた哀しくて、産んじゃいけないのって思ったら、ただただ泣けて……。真司は義父母に知らせるだけで……。

あの時——。

——たとえ障害があっても、俺たちの子供だ。何とかなるさ、とか？

——彩が産みたいなら、家族で力を合わせよう。そうすれば子供は守れる、とか？

——今、命がある子供は、俺たちの子だ。産めよ、彩、とか？

な——んて、言ってくれていたら……。たとえ、最後には中絶することになったとしても、そんな言葉のひとつやふたつはあって欲しかったと思う、今日この頃の彩である。

妊娠したには彩なのだから、もっとしっかりすれば良かったのだろう。今更、身勝手な思いである。だが、そう思っても仕方がない部分が、この家にはあるのかも知れない。

あれから三年経った今も、また障害児だったらと思うと、怖くて妊娠はできない。しっかりと避妊をしている。真司も同意している風で、コンドームを毎回きちんと着けている。そうなったらなっただ、子供という言葉がふたりの間から消えて久しい。

階下の義父母も口には出さない。普段の義父母は口数も少なげで、たまに声が聞こえれば、何かを言い合って口げんかをしている様子。だからなのか時折、義父のどでかい声がする。「さっさと、風呂、入れー！」苛立った声が響く。

義父は大工職人で、グループの頭である。身体も大きく声も大きい、気が短いところのある、いわゆる職人氣質。彩が結婚する前に亡くなった実家の父は、典型的なサラリーマンで、話す声も穏やかな人だった。比較すれば何から何まで、まったく違うタイプである。

障害児だということを父に話せば、「そうか、ふたりでよく話し合って決めなさい」と言っただろう。「お父さんたちは、お前たちが決めたことなら、協力するから」とも言ってくれたであ

ろうと、彩は思う。

大人だけのこの家族、何かが狂っていると、彩は思うようになった。会話の中から、肝心な何かが抜け落ちているように感じる。それは自分だけの思い過ごしなのだろうか？

真司は不自然だとは思わないらしい。何度か訊いてみたが、「何かおかしいの？」と、逆に訊き返された。

だからせめて、地雷を踏まないように、今日も彩は自墮落に生きる。これで良いはずはないの  
だろうが、どうしようもない。これから先、この家族に幸せは来るのだろうか？

半分引きこもりの嫁がいる、この家族に……